



第18回自治体国際交流表彰（総務大臣賞） ～受賞団体から学ぶ交流の取り組み～

（一財）自治体国際化協会交流支援部交流親善課

クレアでは、自治体の国際交流活動のさらなる活性化を図り、地域の国際化に資することを目的として、総務省と共催で、創意と工夫に富んだ国際交流の取り組みを「総務大臣賞」として表彰し、全国に広く紹介しています。

第18回目となる2023年度は、有識者からなる審査委員会の審査を経て、下記の3団体が受賞しました。

【評価のポイント】

◆公益財団法人 兵庫丹波の森協会

丹波の森づくりを担う人材育成を目的とした訪問団派遣事業、国蝶オオムラサキの飼育支援事業、さらには音楽祭の実施と、独自性、テーマ性を持った事業が「兵庫丹波の森協会」を中心に30年近く継続されてきたことが評価できる。

◆和歌山県

インドとの自治体交流に先進性、独自性を感じる。また、他自治体も積極的に巻き込み、フォローしながら交流を進めるなど、日本のゲートウェイとしての役割を担っている点について、優れた機能を持った交流事業であると評価できる。

◆島根県美郷町

30年にわたる長期の交流を続けていることに加え、国際交流を関係人口拡大や移住につなげるという取り組みはこれまでになかった観点であり、先進性・独自性がある。また、地域の活性化に資する効果を挙げているという点においても高く評価できる。

ここからは受賞団体の皆様から国際交流の具体的な取り組みについて、ご紹介いただきます。

ウィーンの森から「丹波の森づくり」を学ぶ

公益財団法人兵庫丹波の森協会

【交流相手先：ウィーン市13区（オーストリア）】

ウィーンの森との交流は、1987年に丹波地域10町の町長、議長などが「兵庫県田園文化都市視察団」としてウィーンの森を訪問したことはじまります。丹波地

域全域を「丹波の森」とし、森をテーマに人と自然と文化が調和する地域づくり（丹波の森づくり）が提唱され、1988年に「丹波の森宣言」採択と丹波の森協会発足、翌1989年には地域づくりの指針「丹波の森構想」が策定されました。



過去の訪問団が記念植樹した榎の木の前で

同年、第1回ウィーンの森親善訪問団が、丹波地域10町長連名の親書をもって正式に姉妹提携を要請し、1993年11月3日、（財）丹波の森協会とウィーン市13区ヒーティング地区とが正式に友好親善提携を結びました。

またウィーンの森へ親善訪問団を派遣し、国や民族、文化を超えて地球環境のあり方を考える、森を通じた文化交流を実施しました。親善訪問団派遣は、1989年から2017年まで22回を数えます。特にウィーンの森を訪れた丹波地域の人々は830人（1987年の欧州視察団を含めれば845人）にのぼり、丹波の森構想推進の機運醸成につながってきました。ウィーン市からは、丹波で開催した1993年の「森林文化国際会議」、2001年「丹波の森・国際井戸端会議」に親善訪問団が派遣されただけでなく、1997年にはウィンドミニカーナ学園の生徒などの親善訪問団を受け入れ、交流が深まりました。

2015年にはウィーン市13区長からの要望を受け、ウィーン市にて国蝶オオムラサキの飼育支援事業を始めました。2016年からウィーン市へ幼虫などを提供し、



市内のシェーンブルン動物園でオオムラサキの繁殖が進められました。2020年7月には、丹波産オオムラサキのウィーン生まれ2世が羽化し、日本の丹波地域から贈られた蝶として広く紹介されました。

「丹波の森国際音楽祭シューベルティアードたんば」は、ウィーン市13区との友好親善提携が発想の原点にあり、提携翌年から開催しています。ホールコンサート、旧10町域の街角コンサートなど住民主体の取り組みで、2024年度で30周年を迎えます。累計13万人を超える参加者があり、地域や世代間交流の促進、郷土意識、連帯意識の高揚が見られます。

今後の展望として、友好親善提携30周年を契機に、2023年にシルケ・コバルド前区長から提案のあった丹波篠山市・丹波市とウィーン市13区との都市間の友好親善提携実現に向けて調整を進めています。そして、新たな展開として、従来の訪問団派遣が中心の交流事業から、ZoomなどWEBシステムを活用した負担の少ない交流（行政、議会、中高生、市民の交流会開催など）をめざします。また、「丹波の森国際音楽祭シューベルティアードたんば」は、2024年度に30周年記念事業を計画しています。



友好親善提携20周年エノキ植栽セレモニー

インド・マハラシュトラ州との10年の軌跡

和歌山県

【交流相手先：マハラシュトラ州（インド共和国）】

和歌山県は在大阪・神戸インド総領事館の協力のもと、世界遺産を有するという共通点があることなどから、2013年10月にインド共和国マハラシュトラ州との間で「観光および農産品と食品加工分野における相互経済関係の促進・拡大を目的とした覚書」を締結しました。

その後、2014年6月には「和歌山県世界遺産センター」と、「アジャンタ・ビジター・センター」が「相

互PRと人的交流を目的とした協定」を締結し、クレアの自治体国際協力促進事業を活用した「インド・マハラシュトラ州における世界遺産観光地域次世代育成事業」を実施したり、首都圏での観光PRイベントを開催するなど、交流を深めました。そのようななかで、同州の要望により、同州観光開発公社内に「和歌山県事務所」を開設し、これまで現地に本県職員を4人派遣しています。

特に、交流を進める上で大きな転機になったのは、2015年9月に、同州のデヴェンドラ・ファドナビス副首相（当時首相）が来県され、インド憲法の父で同州の英雄であるビームラーオ・アンベードカル博士像をインドとの関係が深い高野山大学に設置したことです。本県設置以降、同地には州政府幹部や歴代駐日インド大使、在大阪・神戸インド総領事が訪れるなど、両県州交流の礎となっています。そして、このような実績が称えられ、2023年12月に高野山大学より同副首相に名誉博士号が授与され、今後、さらに交流を促進していくことが約束されました。

当初は、観光や経済、人材での交流が中心でしたが、最近では、青少年やスポーツ交流にまで幅が広がり、特にレスリングにおいては、コロナ禍においても継続してオンラインでの交流を実施していたことなどから、2023年に和歌山県レスリング協会と同州スポーツ・青少年活動総局が覚書を調印し、さらなるスポーツ交流の促進拡大を図ることで合意しました。



青少年スポーツ交流の様子

さらに、2023年に覚書締結10周年を迎えた際には、当県近代美術館にて、インドの伝統的美術であるミティラー美術展を開催したり、インド舞踊団を招へいするなど、多くの県民にも本県とインドのつながりを発信してきました。



覚書締結 10 周年記念式典の様子

そのような積極的な相互交流を続けた実績が認められ、2023年2月に同州と2度目の覚書の更新を行いました（1度目は2018年）。

本県においては、今後も引き続き、これまで積み上げてきた人と人とのつながりを大切に、さまざまな分野での交流を促進することで、マハラシュトラ州との関係をさらに強化していくことはもちろんのこと、本県が同州の日本におけるゲートウェイとして役割を果たすべく、他府県とともに、インドへの相互理解を促進し、今後の交流のすそ野を広げていきたいと考えています。

30年にわたる交流が新たな町づくりの柱に

島根県美郷町

【交流相手：バリ島マス村（インドネシア共和国）】

美郷町（合併前は邑智町）とインドネシア共和国バリ島マス村は1993年に友好協定を締結し、2023年で交流30周年を迎えました。これまで、町民のマス村訪問、町内高校（2009年廃校）の生徒が修学旅行としてマス村へ行くなど、多くの町民がマス村を訪問しました（町民約200人、高校生約300人が訪問）。

また、マス村から高校生が美郷町にホームステイするなど、交流が行われてきました。



マス村からホームステイに来た高校生

そんな交流の取り組みが、近年経済交流や文化交流など他分野にまでつながっています。2019年にマス村から村長が来町した際は「技能実習生の受け入れに関する協定」を締結し、2022年にはバリ島から5人の技能実

習生が訪れ、農業や福祉関係の仕事に従事しています。また、長年マス村に住んでいた日本人が、子どもの成長を機に日本への帰国を検討していたところ、美郷町とマス村の交流を知り、2020年に家族6人で町に移住しました。その方が中心となり開発した、インドネシアの伝統辛味調味料「サンバル」を日本風にアレンジした「みさとサンバル」は、町の特産品となり、好評を博しています。

町はバリ文化をもっと取り入れた町づくりを進めていこうと考え、インドネシアの伝統楽器であるガムラン楽器の購入を計画しました。楽器の知識が全くなかったため、バリ文化に造詣の深い人を探していたところ出会ったのが、静岡文化芸術大学の梅田英春教授でした。美郷町の事情を理解していただいた梅田教授から、個人所有のガムラン楽器を寄託いただき、それをきっかけに、町内にガムラン楽団「ミサトサリ」が発足しました。交流30周年を迎えた2023年には、ミサトサリが町内の各地域でガムラン音楽の演奏を行いました。

2024年は全国でも珍しい海外の特定地域との交流を町づくりに生かす条例「バリの町条例」を制定しました。今年から中学生のバリ島訪問事業を開始するほか、日本全国のガムラン楽団を招致し、「美郷バリフェスティバル」と称した大規模イベントを開催する予定です。現在実行委員会を立ち上げて、準備中です。



ガムラン楽団 ミサトサリの公演

このように、これまでの国際交流の取り組みが、長い年月をかけて進化し、新しい世代に継承され、今また町づくりの柱となっています。継続は力なり。これまでの30年を、これからの町づくりの力として、今後も取り組みを継続していきます。

受賞団体の取り組みを参考として、さらに多くの活発な国際交流が生まれることを期待しています。

クリアでは、毎年8月から当該表彰の募集を行っています。皆様からの積極的なご応募をお待ちしています！